

第1章

名古屋大学との連携

三小田 博 昭

(1) 総論

SSH第1期から第3期SSH研究開発の柱をなす重要なコンセプトは高大接続である。「高等学校教育改革・大学教育改革・大学入学者選抜改革が今後の日本社会を担う子どもたちを育成するための鍵となる」と高大接続改革システム会議の最終報告（平成28年3月）にもあるように、中等教育と高等教育がシームレスに接続することが重要視されている。本校は名古屋大学のキャンパス内に位置している利点を最大限に活かし、名古屋大学の人的・物的リソースを最大限に活用してSSH研究開発を実践してきた。また名古屋大学サイドにおいても、学内に「教育基盤連携本部」を設置し、高校と大学との教育における円滑な接続を図る観点から入試、教育部分における「高大連携」の企画・立案を行うとともに、各学部等が実施する活動の支援等を行っている（名古屋大学教育基盤連携本部HPより）。加えて附属学校内に、「高大接続研究センター」を教育学部と協同で設置し大学教員が常駐して高大接続に関して最先端での研究を行っている。大学教員から講義を直接受けることや、学校から離れ、大学のキャンパスで実際に観察・実験を体験することにより、生徒の興味・関心を深化させていくことができると仮定して、名古屋大学と連携したさまざまな取組を実践している。

(2) 実践

・中津川プロジェクト

名古屋大学教員と協力し開発をしてきたプロジェクトである。実施当初は、岐阜県中津川市にある東海地区国立大学の施設「中津川研究センター」を会場としていた。しかし、センターの閉鎖にともない、2018年度から岐阜県恵那市の「奥矢作レクリエーションセンター」へ移した。2泊3日のプロジェクトで6つの企画を実施する。内容は実習や実験を含み多岐にわたる。

・基礎セミナー

名古屋大学初年次教育にあたる「基礎セミナー」では、大学での学びへの登竜門に位置づいている。大学キャンパス内に立地する強みを生かし、大学での5限

目（16:30-18:00）の講義を大学生とともに受講する。将来的にはアドバンスプレイスメントとして位置付ける。

・生物臨海実習

名古屋大学大学院理学研究科附属菅島臨海実験所（三重県鳥羽市菅島町）で行う実践型実習である。磯採集を行い海辺の生態系を学ぶことに始まり、ウニの発生を受精段階から時間をかけて観察する。海ほたるの観察と並行しながら夜通しのウニの発生観察を行う。

・附属農場講演会・見学会

附属中学生も参加することができる企画。名古屋大学大学院生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センター東郷フィールドでの農場見学のあと、大学教員の講義を受ける。実習と講義が組み合わさっているため、体験に基づく高度な研究をすることができる。

(3) 評価

SSH3期の期間、高大接続を柱にして多くの取組を実施してきた。高校在学中に高等教育に触れる機会を持つことは、自己のキャリアを確立する上で重要なことである。参加した生徒や受け入れた大学教員からの評価も高い。現在は、企画に参加し、その証として終了証を受けるにとどまるが、今後は、高大接続カリキュラム開発を念頭に置いた取組を行うこととしている。

(文責 三小田博昭)